

だが妻のリュックだけが講堂へ着いていない、夜締切りまで、翌日も探したが無く、トラックで輸送途中で落したのだと云う人、何も持たないで来た人が盗んだのだと云う人もいた、故郷へ帰る足は重かったが私の実家では妻には嫂の着物を娘には子供の物を買って当座を凌いだ。

満州引揚者の体験

宮城県 佐々木 賢 二

私は稲作地帯としては一戸当たりの平均反別二町三反(昭和初期のころ)という宮城県遠田郡南郷村(現在町)字大得尻という水田単作の農家に生まれた。小学校五年生のころ、当時の大文学者といわれた香川豊彦先生の「乳と蜜の流れる里」というお話を聞き、自分も将来はどこか広い外国に行き蜜蜂を飼ひ、乳牛を飼育して人間としても自然に生きることこそ人生の最大の幸せであると考えようになった。

昭和六年、高等小学校を卒業したが、十人兄弟の六男

だったため昔は農家では徴兵検査までは生家を手伝う習わしだった。昭和十年ごろ満州移民の話が急速に持ち上がり、最初はブラジルを目標したがある筋の人から満州行きを進められ、結局満州の廣い耕地なら夢の実現も可能と考え、昭和十一年十月、一か月の渡満のための訓練を受けて、翌十二年二月南郷村分村という形で渡満、第五次武装移民として東滿総省密山県里台移民団(後開拓団と変更)に入殖した。

現地はソ連の国境まで七、八キロという特殊地帯で駅はトーチカ式になっており、住民は全部居住証明書を持ち、これがなければスパイと見なされ列車にも乗ることも出来ない地帯であった。私は最初二年ほど本部勤務をしたが、農業をやるべく渡満してきたのであるから部落に帰り、十町歩の畑と一町歩の水田(遠方のため朝鮮人に小作をさせた)を、前年結婚した妻と満人一人を雇い入れ、北海道式の寒地農業を始めた。馬も北海道より導入、昭和十四年これも北海道より乳牛を導入、その外ソ連産の乳牛等も購入して、冬期間は伐採、營農方面も主穀主義経営から軍に納入の野菜二町歩ぐらい作った。そ

の外は家畜の飼料作物を作り、妻と二人で毎年乳牛も増えていくのが楽しく将来を夢見ながら、経営も充実し経済的にも豊かになり、なに不自由なく暮らしていた。

内地においては昭和十六年大東亜戦争の報を聞いたが、我々にはすぐには影響はなかった。しかし昭和十七年ころより内地に送る穀物の出荷が厳しくなり、又我々には満人たちとも仲良くして言葉も日常生活には不自由しないほどに話せたので、満州建国と五族協和のため満人たちとも友好関係を続けて来たのです。そうした平和に暮らしていた矢先、忘れようとしても忘れることができない昭和十九年二月、開拓団本部より急いで出頭せよとの至急連絡があり、何事だろうと行って見れば臨時召集の令状を渡されたのである。

入殖以来丸七年、妻と二人で築いてきたこの経営十一町歩の耕地、馬三頭、乳牛七頭、豚十頭、ニワトリ三十羽、家族は子供も三人となっている。しかも一週間以内に入隊せよ、家族にもこのことは知らしてはならない、黙って奉公袋だけを持って定められた日時までに〇〇駅に行けということになってしまったのです。その時の私

と妻の心境をこの文章を読まれる方は察してみてください。逃げようとしても逃れることの出来ない運命になってしまったのです。

しかし私は、その時驚くべきことを隣に住んでいる満人から話されました。且那は軍隊に行くのではないかと言われたのです。どうしてこんなことが彼等にわかったのか今でも不思議でならないのです。その満人は且那が軍隊に行っても心配するな、俺たちが且那の奥さんや子供たちを助けてやると言うのでした。私はその時黙って聞いていたのだが、情けは人の為ならずの諺の通り私は満人の面倒も見たから、このようなことを言ってくれるんだなと思ったのです。

忘れもしない昭和十九年二月二十六日、月のこうこうと冴え渡る晩でした。二度と帰ることができないかも知れない妻と子供三人を残して、後髪を引かれる思いをしながら東密の石門子満州第一〇一三部隊（野戦重砲）当時、関東軍の虎の子部隊と言われていた機械化部隊に入隊した。

以後はお定まりの苦しい軍隊生活です。入隊して三か

月日の五月に長女六歳、次女四歳が続げざまに死亡との連絡ありしも、初年兵なるが故に葬式にも帰してもらえず、今もって残念でならない。

翌二十年五月ごろと思うが、部隊本部鉄筋コンクリート二階建の屋上に、対ソ連向きに高射機銃を据えつけ警備をしていた。部隊からソ連の国境までは五〇〇メートルくらいだがある時カン、カンという星のマークの飛行機が部隊上空を旋回して行き、我々警備隊は国籍不明機は撃ち落とすのが任務なのだが指揮官は撃ってはならないという。不思議でならなかった。

いよいよ日本の戦況は日に増し悪化し、ソ満国境の部隊はどこへ行ったのか兵舎はがら空きになり、我が部隊においても転属者は続々と出て行き、やがて二十年六月我が部隊にも動員令が下りテナヤワンの出動準備をして、八月四日我々の中隊も石門子を後にする。途中軍用列車の中にてソ連の参戦を知る。我々の部隊が駐屯していた石門子には七日ごろソ連の戦車が入ってきたという。三日遅れたら我々もやられていたかも知れない。列車の止まった所は昌図（シヨウト）という日露戦争の最前線

であり鉢巻山のある所であった。

八月十五日の終戦でソ連との戦も終りとなり、約一月ほどして我々が在満召集者は解除となる。娑婆に出た我々はまづ家族を探さなければならず、どこに居るものやら見当がつかず、さればといって軍服を着用して汽車に乗ることも出来ず、昌図の街から四十キロほど山奥の方に開拓団があることを聞き、一時身を隠す。しかし、そこも住民が暴徒と化し日本人部落を襲撃してくるのでその用心棒みたいなことをしていたが、寒くなってくるので家族のことが気がかりで、そこを朝早く脱出する。

途中満服に着替え満人に変装してきたが満人の警察官につかまった。けれど満語を話せた御陰でうまくだまして通りぬけ、昌図の駅より新京（現在の長春）に向かう。居留民会本部にて調べた結果居所もわかり、新京の南大房身の陸軍官舎にいた妻と再会する。当時十月も半ばを過ぎそろそろ寒くもなってくる時で、発疹チフスに罹っていた。聞くところによると、八月七日避難命令が下りひたすら南へ向かって山また山を越え、途中何度となく暴民の襲撃を受けながら流浪の旅を続けた妻は、私の召

集後十九年七月男子を生み二人の子供を背負っていた。主人の居る人は馬車に物をせ途中トウモロコシや馬鈴薯の畑等がある場合には先に来た人たちは煮炊きして腹ごしらえも出来たが、私の妻のように二人の子供を背負っての旅はいつも行列の最後になって、やっと皆んなと離れないようについて来ている状態なのでいつも生の馬鈴薯、トウモロコシをかじりながらの四〇日余りの流浪の生活だった。

乳飲み子をかかえ乳は出なくなり子供も栄養失調になり、ついに二人の子供は途中で死亡、全く牛や馬のような食べ物での生活をしてきたのである。妻と再会したときは妻は死ぬ一歩手前だったので。病人であり寒くもなってきたのに、着物もなく夜などは寒さに震えていたとのことでした。私もこれが私の妻かと思った時は本当にくやし、私が召集されなかったらこんな苦勞もさせなかったろうし、ましてや死なさずに済んだのではなかったかと思う。一週間ばかりの妻の看護、薬をさがしても薬屋はなくせめて着物だけは着替えさせてやったが、火葬をすることも出来ず、片隅に穴を掘り葬ってきた。

今思えばどうにもならなかったあの時が悔やまれてならない。妻の死後私は新京の市街に居り、時には南尾房身の収容所を尋ねたりもしたが、栄養失調と発疹チフス、あるいは結核等寒くなるに従ってばたばた死んでいった。子供の死骸を葬ることもできず、大がくわえているのも何度か眺め、この世の地獄とは此の事だと思った。

また、ある時新京市内を歩いていたら、同じ開拓団の新潟県佐渡ヶ島出身で並木牛和歌丸と云う人でしたが、この人に佐々木さん家に寄って線香を上げてくれなかと云われて、その人の所に行ったことがありました。彼の言うには、彼は召集にならず部落で男は一人残ったそう、いよいよ避難命令が出て出発となった時、幼い子供、年寄り、は邪魔になるから始末しろと云うことになり、女では手が出ないので並木さんあんたがやれと言われ、まず最初に男の我が子を銃剣で首を刺し殺したそうである。そして次々と幼い子供を刺し殺し、部落民の流浪の旅が始まったのである。

三日ほどして兵隊が、首に包帯を巻いた子供を抱いて避難民に対し、この子供を知らないかと呼んで居ったと

いうのです。並木君も見るともなく見たら自分が銃剣で殺してきたはずの自分の子供であったという。新潟部落を通りかかった兵隊たちが生きている子供を助けて近道を先き回りして、そこに立っていたというわけである。

それを眺めていた、子供を処分してきた奥さんたちに並木さんは、自分の子供だけ殺さないできたと思われぬのが嫌で、その子供を兵隊から貰い受けその場で殺してきたという。此の事実は涙無くして聞かれぬ。このような悲惨事は沢山あります。

私は新京で聞いた話では、北満からの避難民が四十日もの流浪の旅の末、やっと新京に辿り着いたその姿、着物はわかめのごとくぼろぼろ、顔色は栄養失調という姿を見たフランスの宣教師が、人類史上かつてない悲惨事と言われたという。

ともすれ私も昭和二十一年十一月八日新京を出発約一か月の旅の後、九月に佐世保港に上陸、故郷に一人淋しく帰郷し、妻の親たちにも申し訳の仕様もなかった。しかし、私もいつまでもよくよしているわけにはゆかず、再婚を致し開拓者は開拓より外に道なしと決意いたし、

隣村の現在地鹿島台町に活路を求めた次第です。そして開拓と同時に酪農を始め十頭ほどの乳牛を飼っていたが後継者がおらないので今はやめて、残り少ない人生を気楽に土いじりを趣味として暮らして居る次第です。

私の引き揚げ体験、帰国まで

岩手県 小原 昭

父は東京国士館大学を苦学して卒業した。間もなく国士館大学分館が私立高等学校鏡泊学園として、満州の鏡泊湖に創設され、父は学園の農業を担当していた。学園開設二年目にして、鏡泊湖畔太広嶺で匪賊討伐に行つた際、学園の総務長山田先生以下十四人が受難に会い、二期生を迎えたのみで閉校になった。

閉校後、父は総務長山田先生の精神を引き継ぐため、教師一人と学園生若干名を引き連れて北満を目指し、興安嶺を越えて第二の故郷である免渡河へ腰を下ろし、主畜経営を目標とした自由移民の開拓団を設立したのだ。